

線形代数 I 演習

- 第 17 回 固有多項式, 固有値, 固有ベクトル (2) -

担当: 佐藤 弘康

例題 1. 行列

$$A = \begin{pmatrix} 5 & -6 & -6 \\ -1 & 4 & 2 \\ 3 & -6 & -4 \end{pmatrix}$$

の固有値を求めよ. また, それぞれの固有値に対して, 固有ベクトルを 1 つずつ求めよ.

解.

$$\begin{aligned} f_A(x) &= |xE_3 - A| = \begin{vmatrix} x-5 & 6 & 6 \\ 1 & x-4 & -2 \\ -3 & 6 & x+4 \end{vmatrix} \\ &= x^3 - 5x^2 + 8x - 4 = (x-1)(x-2)^2 \end{aligned}$$

であるから, 行列 A の固有値は 1, 2 である.

$B_1 = E_3 - A$, $B_2 = 2E_3 - A$ とおくと, B_1, B_2 の行列式は 0 であるから, 方程式 $B_\lambda x = 0$ は非自明解 v_λ を持ち, v_λ が固有値 λ の固有ベクトルである ($\lambda = 1, 2$).

$$B_1 = \begin{pmatrix} -4 & 6 & 6 \\ 1 & -3 & -2 \\ -3 & 6 & 5 \end{pmatrix} \xrightarrow{E_{12}(-1)E_{32}(-2)P_{12}E_{12}(4)E_{32}(3)\times} \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 \\ 0 & -3 & -1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

より, $\begin{pmatrix} 3 \\ -1 \\ 3 \end{pmatrix}$ は $B_1 x = 0$ の非自明解で, A の固有値 1 の固有ベクトルである.

同様に

$$B_2 = \begin{pmatrix} -3 & 6 & 6 \\ 1 & -2 & -2 \\ -3 & 6 & 6 \end{pmatrix} \xrightarrow{P_{12}E_{12}(3)E_{32}(3)\times} \begin{pmatrix} 1 & -2 & -2 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

より, $\begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ は $B_2 x = 0$ の非自明解で, A の固有値 2 の固有ベクトルである.

□ 注意．固有ベクトルは固有値に対して一意的に定まるものではない．なぜなら， v が固有値 λ の固有ベクトルならば， kv もまた固有値 λ の固有ベクトルである．しかし，上の例題において固有値 2 の場合は $B_2x = 0$ の解の自由度が 2 だから，線形独立な 2 つの固有ベクトルを選ぶことができる．この意味で 固有値 2 の固有ベクトルは 2 つ存在する．

例題 2. 例題 1 の行列 A を対角化せよ．

解. 例題 1 の解より，固有値 1 の固有ベクトルは $\begin{pmatrix} 3 \\ -1 \\ 3 \end{pmatrix}$ である．固有値 2 の場合， $B_2x = 0$ の解は $k \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} + l \begin{pmatrix} 2 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ であるから，固有ベクトルは $\begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ と $\begin{pmatrix} 2 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ である．この 3 つの固有ベクトルを並べてできる行列を P とする．つまり，

$$P = \begin{pmatrix} 3 & 2 & 2 \\ -1 & 1 & 0 \\ 3 & 0 & 1 \end{pmatrix}.$$

このとき， $AP = P \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 2 \end{pmatrix}$ となり， A は P により対角化された．

問題 17.1. 次の行列 A の固有値と固有ベクトルを求めよ．また， A を対角化せよ ($P^{-1}AP$ が対角行列になるような P を求めよ)．

$$(1) \begin{pmatrix} 5 & -6 & -6 \\ -1 & 4 & 2 \\ 3 & -6 & -4 \end{pmatrix} \quad (2) \begin{pmatrix} 2 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & 1 \\ 1 & 1 & 2 \end{pmatrix} \quad (3) \begin{pmatrix} 1 & 0 & -4 \\ 0 & 5 & 4 \\ -4 & 4 & 3 \end{pmatrix}$$

問題 17.2. 正則行列の固有値は 0 でないことを示せ．

問題 17.3. 次のことを証明せよ．

- (1) λ が A の固有値ならば， λ は tA の固有値でもある．
- (2) 正則行列 A に対して， λ が A の固有値ならば， $\frac{1}{\lambda}$ は A^{-1} の固有値である．

問題 17.4. A を直交行列とする．このとき， λ が A の固有値ならば， $\frac{1}{\lambda}$ も A の固有値であることを示せ．

問題 17.5. A を交代行列とする．このとき， λ が A の固有値ならば， $-\lambda$ も A の固有値であることを示せ．

例題 3. 例題 1 の行列 A に対し， $2A^4 - 6A^3 - 4A^2 + 22A - 13E_3$ を計算せよ．

解. 上の例題 1. の解より， A の固有多項式は $f_A(x) = x^3 - 5x^2 + 8x - 4$ であるから，ケーリー・ハミルトンの定理より， $A^3 - 5A^2 + 8A - 4E_3 = O$ である．ここで，

$$2A^4 - 6A^3 - 4A^2 + 22A - 13E_3 = (A^3 - 5A^2 + 8A - 4E_3)(2A + 4E_3) - 2A + 3E_3 = -2A + 3E_3$$

であるから，

$$2A^4 - 5A^3 + 7A - 3E_3 = -2 \begin{pmatrix} 5 & -6 & -6 \\ -1 & 4 & 2 \\ 3 & -6 & -4 \end{pmatrix} + 3 \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -7 & 12 & 12 \\ 2 & -5 & -4 \\ -6 & 12 & 11 \end{pmatrix}.$$

問題 17.6. 次の問に答えよ．

(1) $A = \begin{pmatrix} 2 & -1 & -3 \\ 1 & 0 & 2 \\ -2 & 0 & -1 \end{pmatrix}$ に対して， $A^5 - 2A^4 - 4A^3 + 2A^2 - 2A - 3E_3$ を求めよ．

(2) $B = \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 3 & 4 \end{pmatrix}$ に対して， B^{100} を求めよ．

問題 17.7. 次の行列 A の逆行列を A^{-1} の多項式で表せ．ただし，多項式の次数は 2 以下とする．

$$(1) \begin{pmatrix} 1 & 2 & -2 \\ -1 & 3 & 0 \\ 0 & -2 & 1 \end{pmatrix} \quad (2) \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & -1 & 1 \\ 1 & 0 & -2 \end{pmatrix} \quad (3) \begin{pmatrix} 1 & -1 & 4 \\ 0 & 2 & -2 \\ 0 & 0 & 3 \end{pmatrix}$$

■ 第 11 回の解

問題 11.1 $\sigma \circ \tau = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 4 & 2 & 1 & 5 & 3 \end{pmatrix}, \quad \tau \circ \sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 2 & 5 & 1 & 4 & 3 \end{pmatrix}$

問題 11.2 $\sigma_2 \circ \sigma_3 = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 2 & 4 & 3 & 1 \end{pmatrix}, \quad \sigma_1 \circ \sigma_2 = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 2 & 4 & 1 & 3 \end{pmatrix},$

$$\sigma_1 \circ (\sigma_2 \circ \sigma_3) = (\sigma_1 \circ \sigma_2) \circ \sigma_3 = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 1 & 4 & 3 & 2 \end{pmatrix}$$

問題 11.3 $\sigma \circ \tau = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 4 & 1 & 5 & 3 & 2 \end{pmatrix}, \quad \sigma^{-1} = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 3 & 1 & 2 & 5 & 4 \end{pmatrix},$

$$\tau^{-1} = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 5 & 4 & 2 & 3 & 1 \end{pmatrix}, \quad (\sigma \circ \tau) = \tau^{-1} \circ \sigma^{-1} = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 2 & 5 & 4 & 1 & 3 \end{pmatrix}$$

問題 11.4 (1) (1 5 7)(2 3 9 6) (2) (2 3 6 7 2)(4 5) (3) (1 3 5 6)(2 4)

問題 11.5 (1) (1 5)(2 3)(3 4) など . 符号は (-1)

(2) (1 6)(6 5)(2 7)(7 4)(4 3) など . 符号は (-1)

(3) (1 7)(7 5)(5 8)(2 4)(3 6) など . 符号は (-1)

問題 11.6 例えば, $(5 3)(4 3)(1 3)(3 2)$ や, $(4 5)(1 4)(2 3)(4 5)(1 4)(2 5)$ など

問題 11.7 (1) $\sigma_1 \circ \tau = \sigma_2 \circ \tau$ の両辺に右から τ^{-1} をかけると,

$$(\text{左辺}) = (\sigma_1 \circ \tau) \circ \tau^{-1} = \sigma_1 \circ (\tau \circ \tau^{-1}) = \sigma_1,$$

$$(\text{右辺}) = (\sigma_2 \circ \tau) \circ \tau^{-1} = \sigma_2 \circ (\tau \circ \tau^{-1}) = \sigma_2$$

となり, $\sigma_1 = \sigma_2$ を得る .

(2) $\sigma_1^{-1} = \sigma_2^{-1}$ の両辺に左から σ_1 をかけ, 右から σ_2 をかけると

$$(\text{左辺}) = (\sigma_1 \circ \sigma_1^{-1}) \circ \sigma_2 = \sigma_2,$$

$$(\text{右辺}) = (\sigma_1 \circ \sigma_2^{-1}) \circ \sigma_2 = \sigma_1 \circ (\sigma_2^{-1} \circ \sigma_2) = \sigma_1$$

となり, $\sigma_1 = \sigma_2$ を得る .

問題 11.8 2つの集合 S, S' が等しいことを示すには, 「 $S \subset S'$ かつ $S \supset S'$ 」であること, つまり, 「任意の S の元 σ は S' の元であり, 逆に S' の元 σ' は S の元である」ことを示せばよい. しかし, 対象の集合が有限集合 (元の数有限個) の場合は 「 $S \subset S'$ かつ S と S' の元の個数が等しい」を示せば十分である .

この問題の場合, $\sigma_i \circ \sigma_k, \sigma_j^{-1} \in S_n$ であるから

$$\{\sigma_1 \circ \sigma_k, \sigma_2 \circ \sigma_k, \dots, \sigma_N \circ \sigma_k\} \subset S_n,$$

$$\{\sigma_1^{-1}, \sigma_2^{-1}, \dots, \sigma_N^{-1}\} \subset S_n$$

は明らかである . 問題 11.7 より集合 $\{\sigma_1 \circ \sigma_k, \sigma_2 \circ \sigma_k, \dots, \sigma_N \circ \sigma_k\}$ に重複する元はなく, $\{\sigma_1^{-1}, \sigma_2^{-1}, \dots, \sigma_N^{-1}\}$ についても同様である . また, 元の個数はそれぞれ $N (= n!)$ 個である . したがって,

$$S_n = \{\sigma_1 \circ \sigma_k, \sigma_2 \circ \sigma_k, \dots, \sigma_N \circ \sigma_k\} = \{\sigma_1^{-1}, \sigma_2^{-1}, \dots, \sigma_N^{-1}\}$$

であることがわかる .

■ 第 12 回の解

問題 12.1 $|A| = 2$, $A^{-1} = \begin{pmatrix} 2 & -1 & 0 \\ \frac{3}{2} & -\frac{1}{2} & -\frac{1}{2} \\ -\frac{5}{2} & \frac{3}{2} & \frac{1}{2} \end{pmatrix}$, $|A^{-1}| = \frac{1}{2}$

問題 12.2 $|A| = 2$, $|B| = 6$, $AB = \begin{pmatrix} -1 & 5 & -2 \\ 2 & -4 & 4 \\ 0 & 4 & -2 \end{pmatrix}$, $BA = \begin{pmatrix} -7 & -6 & -10 \\ 4 & 0 & 6 \\ 0 & 6 & 0 \end{pmatrix}$,
 $|AB| = |BA| = 12$

■ 第 13 回の解

問題 13.1 (1) -12 (2) 0 (3) 0 (4) $(a-b)(b-c)(c-a)$

(5) $(b-a)(c-a)(d-a)(c-b)(d-b)(c-d)$ (5) $\frac{a+b+c+d+1}{abcd}$

問題 13.2 (1) まず, 2 列目と 3 列目を 1 列目に加える.

$$\begin{vmatrix} a+b+2c & a & b \\ c & 2a+b+c & b \\ c & a & a+2b+c \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 2(a+b+c) & a & b \\ 2(a+b+c) & 2a+b+c & b \\ 2(a+b+c) & a & a+2b+c \end{vmatrix}$$

$$= 2(a+b+c) \begin{vmatrix} 1 & a & b \\ 1 & 2a+b+c & b \\ 1 & a & a+2b+c \end{vmatrix} = 2(a+b+c) \begin{vmatrix} 1 & a & b \\ 0 & a+b+c & 0 \\ 0 & 0 & a+b+c \end{vmatrix}$$

$$= 2(a+b+c)^3$$

(2) 各列が 1 個の m と $(n-1)$ 個の 1 を成分に持つことに着目し, 2 列目から n 列目を 1 列目に加える.

$$\begin{vmatrix} m & 1 & \cdots & \cdots & 1 \\ 1 & m & 1 & \cdots & 1 \\ \vdots & 1 & m & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & 1 \\ 1 & 1 & \cdots & 1 & m \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} m+(n-1) & 1 & \cdots & \cdots & 1 \\ m+(n-1) & m & 1 & \cdots & 1 \\ \vdots & 1 & m & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & 1 \\ m+(n-1) & 1 & \cdots & 1 & m \end{vmatrix}$$

$$= (m+n-1) \begin{vmatrix} 1 & 1 & \cdots & \cdots & 1 \\ 1 & m & 1 & \cdots & 1 \\ \vdots & 1 & m & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & 1 \\ 1 & 1 & \cdots & 1 & m \end{vmatrix} = (m+n-1) \begin{vmatrix} 1 & 1 & \cdots & \cdots & 1 \\ 0 & m-1 & 0 & \cdots & 0 \\ \vdots & 0 & m-1 & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & 0 \\ 0 & 0 & \cdots & 0 & m-1 \end{vmatrix}$$

$$= (m+n-1)(m-1)^{n-1}$$

(3) 各列が 1 から n までの自然数をそれぞれ 1 個ずつ成分に持つことに着目し, 2 列目

から n 列目を 1 列目に加える .

$$\begin{vmatrix} 1 & 2 & \cdots & n-1 & n \\ 2 & 3 & \cdots & n & 1 \\ \vdots & \vdots & & \vdots & \vdots \\ n-1 & n & \cdots & n-3 & n-2 \\ n & 1 & \cdots & n-2 & n-1 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} \frac{n(n+1)}{2} & 2 & \cdots & n-1 & n \\ \frac{n(n+1)}{2} & 3 & \cdots & n & 1 \\ \vdots & \vdots & & \vdots & \vdots \\ \frac{n(n+1)}{2} & n & \cdots & n-3 & n-2 \\ \frac{n(n+1)}{2} & 1 & \cdots & n-2 & n-1 \end{vmatrix} \\
 = \frac{n(n+1)}{2} \begin{vmatrix} 1 & 2 & \cdots & n-1 & n \\ 1 & 3 & \cdots & n & 1 \\ \vdots & \vdots & & \vdots & \vdots \\ 1 & n & \cdots & n-3 & n-2 \\ 1 & 1 & \cdots & n-2 & n-1 \end{vmatrix}$$

「 i 行目に $(i-1)$ 行目を (-1) 倍して加える」という操作を $i = n$ から $i = 2$ まで (下の行から順番に) 行っていくと

$$= \frac{n(n+1)}{2} \begin{vmatrix} 1 & 2 & \cdots & n-1 & n \\ 0 & 1 & \cdots & 1 & 1-n \\ \vdots & \vdots & \ddots & 1-n & 1 \\ 0 & 1 & \ddots & \ddots & \vdots \\ 0 & 1-n & 1 & \cdots & 1 \end{vmatrix} \\
 = \frac{n(n+1)}{2} \begin{vmatrix} 1 & \cdots & 1 & 1-n \\ \vdots & \ddots & 1-n & 1 \\ 1 & \ddots & \ddots & \vdots \\ 1-n & 1 & \cdots & 1 \end{vmatrix}.$$

ここで,

$$\begin{vmatrix} 1 & \cdots & 1 & 1-n \\ \vdots & \ddots & 1-n & 1 \\ 1 & \ddots & \ddots & \vdots \\ 1-n & 1 & \cdots & 1 \end{vmatrix} = (-1)^{\frac{(n-2)(n-1)}{2}} \begin{vmatrix} 1-n & 1 & \cdots & 1 \\ 1 & 1-n & \ddots & \vdots \\ \vdots & \ddots & \ddots & 1 \\ 1 & \cdots & 1 & 1-n \end{vmatrix} \quad (17.1)$$

であるから, 問題 13.2(2) の結果を用いると

$$\begin{vmatrix} 1 & 2 & \cdots & n-1 & n \\ 2 & 3 & \cdots & n & 1 \\ \vdots & \vdots & & \vdots & \vdots \\ n-1 & n & \cdots & n-3 & n-2 \\ n & 1 & \cdots & n-2 & n-1 \end{vmatrix} = \frac{1}{2} (-1)^{\frac{n(n-1)}{2}} n^{n-1} (n+1)$$

を得る .

(17.1) の証明 \mathbf{a}_i ($i = 1, \dots, k$) を k 項数ベクトルとする .

$$\begin{aligned}
 \left| \begin{array}{cccc} \mathbf{a}_1 & \cdots & \mathbf{a}_{k-1} & \mathbf{a}_k \end{array} \right| &= (-1) \left| \begin{array}{cccc} \mathbf{a}_1 & \cdots & \mathbf{a}_{k-2} & \mathbf{a}_k & \mathbf{a}_{k-1} \end{array} \right| \\
 &= \cdots = (-1)^{k-1} \left| \begin{array}{cccc} \mathbf{a}_k & \mathbf{a}_1 & \cdots & \mathbf{a}_{k-1} \end{array} \right| \\
 &= (-1)^{(k-1)+(k-2)} \left| \begin{array}{cccc} \mathbf{a}_k & \mathbf{a}_{k-1} & \mathbf{a}_1 & \cdots & \mathbf{a}_{k-2} \end{array} \right| \\
 &= \cdots = (-1)^{(k-1)+\cdots+2+1} \left| \begin{array}{cccc} \mathbf{a}_k & \mathbf{a}_{k-1} & \cdots & \mathbf{a}_2 & \mathbf{a}_1 \end{array} \right| \\
 &= (-1)^{\frac{k(k-1)}{2}} \left| \begin{array}{cccc} \mathbf{a}_k & \mathbf{a}_{k-1} & \cdots & \mathbf{a}_2 & \mathbf{a}_1 \end{array} \right|
 \end{aligned}$$

□

問題 . (17.1) 式は

$$\left| \begin{array}{cccc} 1 & \cdots & 1 & 1-n \\ \vdots & \ddots & 1-n & 1 \\ 1 & \ddots & \ddots & \vdots \\ 1-n & 1 & \cdots & 1 \end{array} \right| = (-1)^{\lfloor \frac{n-1}{2} \rfloor} \left| \begin{array}{cccc} 1-n & 1 & \cdots & 1 \\ 1 & 1-n & \ddots & \vdots \\ \vdots & \ddots & \ddots & 1 \\ 1 & \cdots & 1 & 1-n \end{array} \right| \quad (17.2)$$

と表すこともできる . n が奇数と偶数の両方の場合に (17.1) と (17.2) の符号が等しくなることを確かめ , (17.2) と書ける理由を考えよ ((17.2) の行列は $(n-1)$ 次正方形行列であることに注意せよ) . ただし , $[k]$ は k を越えない最大の整数を表す (例えば , $[\frac{13}{4}] = 3$, $[6.73] = 6$, $[\pi] = 3$) .

問題 13.3 $A^{-1} \cdot A = E_n$ より , $1 = |E_n| = |A^{-1} \cdot A|$. 行列式の性質より , $|A^{-1} \cdot A| = |A^{-1}| \cdot |A|$. 以上のことから , $|A^{-1}| = \frac{1}{|A|}$ を得る .

問題 13.4

$$\begin{pmatrix} E_n & E_n \\ O & E_n \end{pmatrix} \begin{pmatrix} A & B \\ B & A \end{pmatrix} \begin{pmatrix} E_n & -E_n \\ O & E_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} A+B & O \\ B & A-B \end{pmatrix}, \quad (17.3)$$

かつ , $\left| \begin{array}{cc} E_n & E_n \\ O & E_n \end{array} \right| = \left| \begin{array}{cc} E_n & -E_n \\ O & E_n \end{array} \right| = 1$ であるから , (17.3) の両辺の行列式をとれば ,

$$\left| \begin{array}{cc} A & B \\ B & A \end{array} \right| = |A+B| \cdot |A-B|$$

を得る .

問題 13.5 A を n 次交代行列とする . このとき ,

$$|A| = |{}^t A| = |-A| = (-1)^n |A|$$

であるから , n が奇数なら $|A| = -|A|$ となり , $|A| = 0$ を得る .

問題 13.6 A を直交行列とすると, ${}^t A \cdot A = E_n$ より, $1 = |E_n| = |{}^t A \cdot A| = |{}^t A| \cdot |A|$. $|{}^t A| = |A|$ より, $|A|^2 = 1$ を得る.

問題 13.7 (問題 13.2 を用いる) $n = 4$ の場合だから, $\frac{1}{2}(-1)^{\frac{4(4-1)}{2}} 4^{(4-1)} \cdot (4-1) = 160$.

(問題 13.4 を用いる) $A = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 2 & 3 \end{pmatrix}, B = \begin{pmatrix} 3 & 4 \\ 4 & 1 \end{pmatrix}$ とおくと

$$\begin{vmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 2 & 3 & 4 & 1 \\ 3 & 4 & 1 & 2 \\ 4 & 1 & 2 & 3 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} A & B \\ B & A \end{vmatrix} = |A+B| \cdot |A-B| = \begin{vmatrix} 4 & 6 \\ 6 & 4 \end{vmatrix} \cdot \begin{vmatrix} -2 & -2 \\ -2 & 2 \end{vmatrix} \\ = (16 - 36) \cdot (-4 - 4) = (-20) \cdot (-8) = 160.$$